

ドナルド・メルツァーとの語らい (1989)

ジェームズ・アストール

■J・アストール: 児童を対象とされるご専門には、そもそもどういう動機から興味を覚えられたのですか？

メルツァー: その道筋は極めてストレートだったといえます。わたしは精神分析家になるため、まず医学生として医学を修めたわけです。医学校 (medical school) に籍を置いていた当時、わたしは選択科目で Bellevue Hospital の Loretta Bender 病棟に研修に行きました。そこには精神分裂病の (schizophrenic) 子どもたちを対象とするオリジナルな治療体制がありまして、その折の強烈な印象がわたしの心がかっちり掴んだわけなのです。実はわたしがメラニー・クラインの名前を初めて聞いたのは、そこでだったのです。Loretta Bender がわたしに『The Psychoanalysis of Children』の本を貸して下さり、それがまたわたしの心を烈しく揺さぶったわけです。そうした状況の中で、わたしはかなり重篤な精神病の (psychotic) 子どもたちに出会っていたことになります。ほんとうに胸が引き裂かれるようで、また実に心魅せられるといったふうでした。治療的なことは何もなされておられません。彼らは電気ショック療法を施されていたのです。

■J・アストール: あなた自身もそうした子どもたちに電気ショック療法を施されたのですか？

メルツァー: いや、医学生にそれが要請されることはありませんでした。それから精神医学の研修生としてセント・ルイス (St. Louis) (訳註: ワシントン大学) に籍を置き、児童精神医学を専攻しまして、児童精神科医になったわけです。そこから、ようやくわたしは空軍をとおして渡英の機会を得、メラニー・クラインのもとで研鑽を積むことになったという次第なのです。それは1954年のことです。

■J・アストール: 空軍で何をしておられたのですか？

メルツァー: ああ、あの当時は朝鮮戦争が勃発しておりまして、当局は医者たちを軍役に就かせることができず、敢えて徴兵したわけです。それから2年間の軍務をやり遂げた時点で、或る特別のポストへ配属されるように画策し (訳註: ロンドンへの赴任)、わたしは彼らと取引をしたというわけなのです。

■J・アストール: あなたはメラニー・クラインの著作に烈しく心を掴まれたということをおっしゃっておいでですが、その経験以前に何か別の方法で子どもたちの治療を試みられたことはおありでしたか？

メルツァー: わたしがセント・ルイスを選んだ理由は、それがわたしの家族とわたしの妻の家族のちょうど中間地にあったという以外にもう一つ、そこには「Chicago Institute」と連携しての研究グループがありまして、それに児童精神医学の大きな病棟があったということなのです。そこは純然たる精神分

析的オリエンテーションが主導でした。わたしの児童精神医学のトレーニングに於いては、分析的セラピーが何よりも優先して大きく比重を占めておりました。セント・ルイスに6年間滞在していた間、わたしは個人分析を受けましたし、トレーニング・セミナーをも受講しております。そこでわたしは自閉症の子どもたちとの治療を開始したのです。リサーチということ言えば、自閉症の子どもたちをも対象としましたが、それに子どもの斜視 strabismus についてもでした。

■J・アストール:斜視ってなんですか？

メルツァー:やぶにらみ(内斜視)のことですよ。実はわたし自身やぶにらみだったんです。それでそれにすごく興味があったんですよ。実際に外斜視(白目がち)になることがあります。今では大丈夫なんですけどね。疲れがたまると、たまにそれが出ることはありますけれども。。

■J・アストール:セント・ルイス当時に分析を受けたとおっしゃいましたが、おそらくクライン派精神分析ではなかったんでしょうね。

メルツァー:そのとおりですよ。セント・ルイスでは誰もメラニー・クラインの名前など聞いたことなかったのです。病棟で彼女の業績について触れ回ったのは、実にわたしが初めてというわけでした。。しかしながら、そこでわたしが携わった医療業務には、ごく限られた理解ではありましたが、メラニー・クラインの考えに触発されたものが大いに反映されていたはずですよ。

■J・アストール:1954年にイギリスに来られたわけですが、Mrs. クラインとすぐさま分析を開始したんですか？

メルツァー:わたしはイギリスに到着したその日から分析を開始しております。それ以前にも此の地を度々訪れておりました、万事調整してあったわけです。わたしはDr. ウニコットから興味深いお手紙を頂戴しましたよ。それは、Mrs. クラインから分析を受けるからといって、何か特別な人としての待遇を期待してはならないと釘を刺すような文面でした。まあ、しかしながら、実際のところであれば、とても快く受け入れられたといえましょう。

■J・アストール:それというのはすべてインスティテュート(Institute)でのトレーニングに迎えられたといったことになるわけですか？

メルツァー:そうです。わたしが空軍の将校としてここにやってきた当初は、滞在期間は4年という限定付きであったわけです。彼らはわたしをインスティテュートの訓練生として迎えてくれまして、それで、すぐさまトレーニングが開始されたのです。そのために1年待つといった手間が省かれたわけなのです。つ

まり、わたしのアメリカ合衆国でのトレーニングの履歴を考慮に入れてくれたということなので、その点でも、事実Dr. ウイニコットは、わたしにとっても親切にしてくださったということになります。

■J・アストール:彼は、当時「The Professional Committee」の議長でしたかね？

メルツァー:さあ、どうでしょう。覚えておりません。わたしはインスティテュートでトレーニングを受けさせてもらったわけですが、スーパーヴィジョンをハンナ・シーガル、ハーバート・ローゼンフェルドから受けまして、児童のケースについてはベティ・ジョゼフ、エスター・ビック、そしてハンナ・シーガルに付きました。

■J・アストール:それらの中で、あなたがもっとも影響を受けた方は誰だったか、ご記憶ありますか？

メルツァー:それはMrs. ビックでしょう。彼女は子どもについて一番良く理解していた人といえましょうし、子どもとの経験ということでは卓越していたのです。その当時、クライン・グループでは、子どもたちを深く経験している人というのは僅かで、ごく限られていたのです。Mrs. ビックは子どもを対象にしたリサーチにも携わっておりますし(彼女の学位は児童に関連しております)。彼女はタヴィストック・トレーニングの企画を立ち上げた人でもありますし、子どもたちの生きざまにうかがわれる‘抑うつ的及び妄想的・分裂的なもの交錯’といったことについては実に深い理解があったのです。他の人々はどちらかという、抑うつポジションに到達したら、その後は順風満帆であるといったふうに考えがちでした。彼女はそうではなく、ポジションというのを‘価値’に関連付けて考えておりましたし、スプリッティングのプロセスに関係しての構造的意味合いでのポジションといった理解ではなかったわけです。彼女の業績は、そのままピオンの公式化「 $P_s - D_p$ 」へと繋がるものです。そしてころというものが妄想的・分裂的そして抑うつ的な状態を絶え間なく行ったり来たりと交錯するものであるといった概念にも…。ずうっとわたしは彼女と、その引退まで、ご一緒に研鑽を深めてまいりましたし、そもそもわたしのタヴィストック・センターでの講義が始まったのも、彼女の後押しのお陰だったわけです。

■J・アストール:それで、この時期どこで臨床をなさっておいででしたか？

メルツァー:すべてプライベート(個人契約)です。実は、市民権を得るのにちょっと手間が掛かったのです。そこで、2年ほどの間まったくのところインスティテュートでのトレーニングに関わっておりましたわけで…。或る権威筋が、わたしがマッカーシーのアメリカからの‘脱走者’、つまりコミュニストではないかと嫌疑を掛けたわけなんです。しかし一旦それが何ら根拠のない疑惑だということが判明してからは、プライベートでケースを持てるようになったのです。勿論あの当時、クライン・グループの間では、自らが訓練生であるというだけではなく、自分の子どもたちをもまた分析に通わせるということが結構珍しくなかったのです。Mrs. クラインは子どもたちの‘予防的分析 the prophylactic analysis’というものに多大なる信頼を寄せていたわけです。そこでわたしの子どものケースのほとんどすべてが同僚の子どもたち、もしくは同僚の親戚の子どもたちといったことになっていったわけです。彼らがとても協力的であっ

たことは言うまでもありません。ですから、必要とあらば、かなりの年数セラピーは継続されてゆきました。それで友人ができるとか、親しい間柄になるといったこととも違いますけれどもね。それはそれとして・・。

■J・アストール: 今日と比較しますと、どうやらあなたの児童分析の経験は、現在のわれわれの状況とはとても違った雰囲気を感じますねえ。

メルツァー: ええ、今日では児童分析はそのほとんどがクリニックとかヘルス・サービス(保険診療)の分野でありますし、その一方で精神分析は、そのほとんどがヘルス・サービスの枠外でやられてますからねえ。わたしの立場は異例だったといえましょう。かつてわたしが居りました合衆国での児童精神医学の状況というのは、児童ガイダンス・クリニックが途方も無く急速に発展したという背景がありまして、実に大きな治療への期待感がありましたわけで・・。でも、直にそれも失望に取って換わられたのです。そこでは、これといった大したスキルなど醸成されてはいなかったからです。チームという概念に大きく依存しておりました。心理職、ソーシャル・ワーカー、精神科医といった・・。それで、その結果はかなり惨敗といったふうでしたから、児童精神医学の評判は随分と痛手をこうむったといえます。それは力動的、かつ精神的に鼓舞された人たちの集まりであったわけですが・・。

■J・アストール: しかし、ここイギリスであなたは分析に深く傾倒する、敏腕な実践家の集う小さなグループの中に身を置かれたわけですが、それって、混乱しませんでしたか。ティーチングとか治療に携わるといったこと、それにスーパーヴィジョン、そして分析といったことですが・・。

メルツァー: いや、わたしはMrs. クラインのティーチング・グループに入ってはおりません。インスティテュートにおける児童分析トレーニングは当時、ケースがありスーパーヴィジョンはあったとしても、かなり名ばかりで、文献講読セミナーなどは概しておざなりでしたしね。それは児童部門の建物が出来る前の話ですが。その建物が出来上がったときには、児童分析は影の薄いものになってしまっていたのです。Mrs. クラインの死後、クライニアン流の児童を対象としたトレーニングは俄然落ち目になったかのようでした。児童トレーニングはまったくのところ停止状態にありまして、1967年ごろになってようやく復活を遂げます。そしてマティ(Mrs. Martha Harris)がトレーニングを再編制することを依頼されたわけでありまして。しかし、決して元通りにはなりません。その理由の一つは、児童サイコセラピートレーニングの隆盛です。タヴィストック・センターにしろ、ハムステッド・クリニックにしろ、児童に興味を抱く多くの人たちを惹きつけ、そちらに応募が殺到してしまったわけなのです。それにもう一つ、インスティテュートは、まずは大人を診る訓練から始めるべきで、児童を診る訓練はその後だということを主張しておりまして、それなぞちょっと馬鹿げた方針だとわたしは思うわけですが、それに彼らは固執していたわけ。つまりのところ、いざ児童相手に訓練が始まるとしたら、彼らはもうすでに30代になっているわけですよ。

■J・アストール:それらの背景となる理由は何なのでしょう？

メルツァー:まあ、謎でしょうね。わたしにはよく解りません。或る意味、児童分析は成人分析の‘継子’みたいなものとして扱われているといったことでしょう。子どもらとの治療に取り組むことで得られるものがどれほどのものか、その研究的価値を否認しているともいえるでしょう。まあどちらかという、彼らは精神病患者との治療により功績を認めるところがありました。子どもたちとの治療、そしてそこから得られた知見などには何ら顧みることがなかったといえましょう。ビオンの分裂病の子どもたちとの治療、それにローゼンフェルドの分裂病の成人との治療、それらの論文は実に驚異的ではありませんでした。しかしわれわれの発達についての理解、そしてところがどのように機能しているのかといった事柄には、実際に彼らの貢献はごくごく些少でしかなかったわけであります。それがあつた部分、‘妄想・分裂ポジション’と呼ばれるようになっていったことには誤解がありましよう。そこでは分裂病とは、発達の或る段階の展開に過ぎないというふうに考えられていました。それは結局のところ、正常な発達とは全然異なる何かであると判明したわけであります。従つて、分裂病についての発見から、ところがその機能においてまったくの方向間違った方向へ向かうといったことは理解できたとしても、それはどのようにしたら健全さを取り戻すことができるのかの軌道修正についてはごく僅かばかりか、もしくはまったく何も貢献し得なかったということになりましよう。そうでありますから、子どもの発達という概念に何ら貢献することもありませんでしたし、それに精神的機能の構造についての概念についてもそうであります。あの当時は1950年代そして60年代の熱狂、つまり分裂病者を治療するといった熱狂の時代であつたのです。勿論、治療的結果はかなりの幻滅をもたらしたといえましよう。それで研究成果は、当時それまでの治療経験やら既成の概念とも十分に構成的に結び付きを得られずに終わったということになります。それはちょっとした袋小路であつたわけですから。そこからしばらくまるで閑古鳥みたいな、さびれて寂しい時期が続きます。とても面白いですよ。こうした臨床に没頭して、ヘルス・サービス(保険診療)のもとで活動実践していた分析家たちはそこから離れて、プライベートで開業を始めたということなのです。ごく最近になって、どうにかかつての熱狂は復活したかのようです。ここではそれはさほど顕著ではありませんが、スカンディナヴィアの諸国ですと、実際のところ分裂病の患者の治療がかなりの年数に亘つて施される精神病院システムがありますし、そして延々と10年とか15年ほど長期の入院治療が実践されている施設もあります。イタリアでもまた、幾つか分裂病者で青年期にある若者たちとの貴重な治療について報告されております。

■J・アストール:時代の流れが「精神病理」から遠ざかつて、むしろ「発達」へと人々の関心がシフトされたということをおっしゃっておいでなのですか？

メルツァー:はい、そのとおりです。

■J・アストール:Mrs. クラインの‘予防的分析 the prophylactic analysis’といった考えは、このシフトの或る部分として位置づけられますか？

メルツァー: Mrs. クラインの予防的分析といった考えは、心理学的に言えば極めて妥当かつ良識的であったといえませんが、社会学的に見れば、それは無理な話ということになりましょう。まず何よりも、問題を抱える子どもの治療には、トレーニングが必要というだけでなく、才能(talent)が要ということがはっきりしてまいりました。それに、この国では明らかに、親たちに求められる時間とお金の犠牲は、今後ともさほど期待されそうにないこともはっきりしてまいりました。この国のカルチャーそのものが、この点において有利に働くことはないのです。分析の‘予防的価値’ということでは、セラピーよりもむしろ他の方向で現われているといえましょう。子育て、そして教育システムにおいてであります。

■ J・アストール: Mrs. クラインのモデルは、「病理」というよりは「発達」のほうに向けられていると思われませんか？

メルツァー: そうですねえ。病理に関心があるとか、発達に関心があるといったセラピスト側の立脚地の違いとは、第一義的には方向性の問題でありましょう。臨床素材への関心が、それを前向きに、パーソナリティーの発達といったふうに捉えるか、もしくはその退行的な動き、それを固着点、幼児的葛藤、そして幼児的神経症の反復といったものの顕れと見るか、そうした違いであります。それは概してそれぞれの見解が問題になりましょう。つまり過去を振り返り、それを理解しかつ再構築しようとしているのか、もしくは発達を助長すべく、むしろ前向きにみようとしているのかといったふうに……。フロイトの見地とは、かなり知的なものであります。そしてそこに分析家は何かを為し得るものとしての見解をはらんでいるわけです。片やクライン派の見解ですと、それも徐々にそうなったわけですが、強調点が発達のなプロセスにあり、またそれらを大いに支援してゆくといったことにあるのでして、第一義的に成長と発達が大きいにもたらされ得るように、その場の雰囲気創造してゆくといったことなのです。

■ J・アストール: しかし、おそらく、分析的枠組みの中にある退行的な側面というものを無視できませんでしょう。

メルツァー: 退行という概念は、もはやクライン派の分析においてひじょうに有効なものとはわたしは思っておりません。パレントなど他の人々の見解から、それは手段として見做され、それをとおしてセラピーが可能だということになります。ウニコットにしても同じでしょう。治療的状況とは、患者に退行させることができ、従って過去を再体験させることができるといったふうに……。これは、クライニアンの見解からいえば、治療的プロセスを描写する上で有効とは思われません。わたしの著書『The Psychoanalytic Process』でも確かそうでしたように、わたし自身が用いる概念において、その言葉が一度でも使われていましたかどうか……。明かにそれは、わたしが治療的方法について考える上で全然ピタッとこないわけです。疑いなく、転移が退行として見做されることもできましょう。しかしMrs. クラインの転移についての見解は、第一義的に、内的状況およびその具体的なものが即時的に外在化されたものということなのです。その意味するところは、再構成された分析とは、科学的価値という点で

は問題を孕んでおり、そして治療的価値といった点でも殊更に興味を持ち得ないものといったことになります。もしも患者が再構成に関心があれば、多くの患者らがそうですが、彼らは再構成できるわけです。単純に申し上げれば、物語(ストーリー)が変えられるということでもあります。であれば、勿論、もしも分析家が過去に興味があるとすれば、患者は尚のことそうした自らの退行的動勢に屈することになりがちでしょう

■J・アストール:しかし、たとえ分析家が過去に興味を持っていないとしても、Mrs. クラインは、転移を‘行動化された記憶(memory in action)’として描写しているわけですし、これは明らかに退行的要因を孕^{はら}んでいるとは言えないでしょうか。

メルツァー:そうしたクラインの表現は、分析において再現される‘前・言語期’といった概念をある程度正当化する方便ともいえましょう。すなわち、心の深層から浮き上がって、転移において再現された、そうした関係性、そうした構造、それらが或る種の‘行動化された記憶’といったものを成り立たせているわけです。しかしそれを文字通りにとって、恰もそこで反復され、転移において表出されているのは、例えば誕生後6ヶ月目において起きたあれやこれやの文字どおりの反復であるといったことなどは、クライニアン的フレームワークの基本構成要素では毛頭ありません。

■J・アストール:Mrs. クラインとの6年に亘る分析の結果として、あなたの子どもたちとの分析治療の経験はどのように変化したとお考えですか？

メルツァー:アメリカに伝統というものがあるとすれば、プレイ・セラピーということになりますし、それは本当に子どもを相手にして遊ぶことなわけです。わたしのここでの体験、それに彼女の著書『The Psychoanalysis of Children』を読むことで大いに刺激された期待感ということで述べますと、あれをご覧になられたらお分かりのように、Mrs. クラインもまた子どもたち相手に関与することには実に積極的でありましたわけで、だがその動きは明らかに観察、思索そして語らい(observation, thought and talking)といった方向へとすばやく切り替えられていったといえましょう。子どもと一緒に動き回ることとはなくなります。無論、場のセッティングを維持するのに必要な動きはしますけれども…。わたしにしても、変化は、ここで子どもの治療を始めて最初の2年間以内にすばやく起きていったといえます。そしてそれ以来、ずうっとわたしは一貫してそのようでした。ここ何年もわたし自身が子どもをセラピーするといったことはありませんが…。コンサルテーションをしますときには、尚もそういった感じです。子ども相手の臨床に携わる人たちをスーパーヴィジョンする場合にしても、わたしが奨励するのは、観察、思索、そして語らいといったことです。椅子に座ったままで、子どもが自分の思いのままにやりたいようにやるよう励ますといった具合に、そして自らを観察者の位置に据え置くといったことです。Mrs. クラインも、随分そのスタンスにおいて変わってまいります。『The Psychoanalysis of Children』を『The Narrative』と比較してみてもお分かりのように、その臨床において、彼女の動きがそうした方向へと大いに駆り立てられていったことが見て取れます。

■ J・アストール:しかし、あなたの分析体験から得た、よりパーソナルなレベルでの変化というのは何になりますか？

メルツァー:そうですね。思いますに、治療的でなければならないといったことにもはやこだわらなくなりましたし、治療のゴールを見定め、かくあらねばとそちらへと舵取りしてゆくことをも考えなくなりました。むしろそれがどこへ向かって終わってゆくにしろ、成り行きに任せて、結末をオープンにするということです。ここから、分析はくそれ自らの自然な道筋(ヒストリー) its own natural history を辿る>といった考えへと発展したことになります。直接的な働きかけを止めて、もっとパッシヴ(受け身)になってゆき、観察すること、そして折々にコメントを差し挟む^{さきはさ}といった参入の仕方です。そこでの動きは専らセラピイのセッティングを維持してゆくといったことへ向けられており、そうした働きかけの全体のありようが臨床家としてのわたしのスタイルになっていったといえます。それがわたしのスタイルとして急速に固まってきたのは、ここでのトレーニングのごく初期の段階でありました。

■ J・アストール:あなたは、いつぞやお話のなかで語っておいでですが、Mrs. クラインの概念(考え)の幾つかがひどく苛酷(harsh)に聞えるのに比して、実際に分析の中の彼女はとても心温かで、かつユーモアのある方であったということですが・・。

メルツァー:そうですね。彼女はまずとてもよく話されたんです。それはたくさん頭に思い巡らすことがあって、アイデアに溢れておりましたし、それに彼女はユーモアを解し、とてもその語り口がウィットに富んでいたのです。そしてセッションは、大概のところいつも楽しいものだったわけです。それなどわたしが明らかに彼女から学んだことであります。そうした趣きは、全然アメリカの精神分析とは違っておりまして、彼の地での雰囲気はどちらかという気難しく、陰気臭いもので、分析家はどちらかという押し黙ったままでありましたから・・。

■ J・アストール:Mrs. クラインは、精神分析の科学性(the science of analysis)といったことについては関心を抱かれてましたか？

メルツァー:そうですね。Mrs. クラインは科学というものについてさほど精通しているふうではありませんでした。それに大して興味があったようにも見受けられません。実際彼女は医学の勉強を始めようとしていたとかは聞いてますけれどもね。どちらかという、芸術とか、文学そして音楽に興味があったといえます。彼女は、フロイトとは違って、精神分析を科学的な位置づけで考えようといったふうでは全然なかったといえましょう。どちらかといえば、その人道主義的な価値(its humanist value)といったことに関心があったように思われます。その科学的ステータスではなくて・・。オーソドックスなクライニアン・グループでは、或る種の苛酷さ^{はびこ} harshness が蔓延^{はびこ}っていったように感じられるわけですが、それはまったくのところMrs. クライン本人の精神とは相容れないものだと、わたしは考えております。

■J・アストール:あなたの臨床にそうした苛酷さはおありだと思いですか？

メルツァー:そうですね、わたしの臨床のなかで、苛酷さがあるとすれば、それは内的価値(internal values)をどちらかという執拗に強調することから来ているように思われます。わたしの臨床における発展の或る一面はピオンから来ているわけですが、社会的パーソナリティー(the social personality)というものが甲羅(a carapace)みたいなもので、それは実際のパーソナリティーの発達には殆どもしくは全然何の益ももたらさないといいた見解なのです。まあそういったことが、或る意味わたしの臨床の苛酷な側面と見るひとが見ればそう呼べるかもしれません。

■J・アストール:パーソナリティーの発達に関してですが、『The Apprehension of Beauty』の中で、<種族に内在する前概念、およびその固有の千年に亘る経験>(註:原書 P.63/邦訳書:P.82)といったことをお書きでしたね。これがパーソナリティーの発達にどのような意味合いを持ち得ることになりますか？

メルツァー:わたしは進化論的な見解を有していると思うんですよね。脳がまずあって、それがこころ(mind)にとってインストルメント(道具)として活用され、進化していったというふうに…。脳の構造というのは、何億年という時を経て発達したわけですし、遡れば‘生命の樹’からということになりましょうが…。どの種族にしろ、誕生した未熟な幼きいのちが生存し続けるのに不可欠なものとして、或る関係性の問題を孕む傾向がありそうです。その種族がいかなるファミリーの形態をとろうと、それがいかなる環境にあろうと…。人間の赤ちゃんの場合ですと、常にそうしたもののなかで生まれてゆくわけですが…。狐きつねの赤ちゃんとか、もしくは有袋哺乳類の赤ちゃんなどは、その備わった素質が当然違ったふうであります。その違いとは、脳の実際の構造にゆだねられているわけですし、それがまた胎内から誕生した最初のショックに反応しての即座で反射的な適応様式にも現れてまいります。例えばカンガルーの赤ちゃんの場合、産道を出てからもぞもぞと母親のお腹をよじ登り、袋の中へと這い上がってゆき、そうして袋の中にある乳首をしっかりと啜くわえるのですから、人間の赤ちゃんが泣き叫んでオッパイを求めるとはだいぶ違ったやり方を選んでいるわけです。もしも人が、こころ(mind)というものを現象学的構造として考えるとしたら、(それは脳の潜在力から生起するわけですが)、その操作方法とは、極めて複雑な経験について思考するのに「象徴形成」を用いることであります。それは頭脳操作上、或る種の反応パターンとして処理されるものと仮定せざるを得ないわけです。フロイトが「イド」と呼んだもの、或はピオンが「内在的・前概念」と呼んだものでありますが…。それらは、言えるならば、石とか、粘土もしくは木にも似て、素材なのでありまして、そこから象徴形成を通して、赤ちゃんの経験に意味がもたらされ、認識構造のビルディング・ブロックが徐々に積み上げられてゆくわけです。明らかに近来、誕生以前に遡って‘メンタリティー(精神)’の始まりを想定してみますと、どうやらすでに情緒的経験は子宮において始まっていると考えざるを得ないことになってまいりました。従って、象徴形成の萌芽および思考の萌芽というものは、子宮に遡ることができるということであり、そし

て誕生という経験は、飽くまでも経験なのであって、単に揉みくちゃにされて虐げられる (battering) とも違うと言わざるを得ないのです。

■ J・アストール: それでは、発達^{かて}の糧ともなる真実性 (truthfulness) を内含する経験、そしてそれら
‘内在的・前概念’との関連性とはいかなるものとお考えですか？

メルツァー: それについては、以前わたしが書きました或る臨床経験から確信を得たように思っておりまして、‘経験の真実性’、すなわち‘真実なるものに溢れた観察’、またそうした‘出会いの記録’は決して跡形もなく消し去られてしまうことはあり得ないということ。それは隠蔽される (cover up) ことはありまじうが、でも復活し蘇える (recover) ということがあるわけです。これには或る意味でフロイト的側面がうかがわれます。それは多様なありようで‘抑圧’の概念にも合致いたします。またフロイトが述べておりますように、記憶錯誤は事実あった事柄の記憶喪失を隠蔽するのに活用されるといったふうに…。ここから、「精神発達の問題」とはすなわち‘真実性の如何が問題となる a problem of truthfulness’といった信念が生まれるべく、そうした一因にもなろうかと思われます。つまりそれは機能する様式としてでありまして、観察の真実性、そして象徴的フォームの精巧さにおける真実性、それらがあってこそ経験は「思考すること thinking」に活用され得るものとなるといったことです。非真実性 (untruthfulness) というものは、思考 (thoughts) の発達のそれぞれ違った段階で、それぞれ違ったありようで表面化されてまいります。それ自身、観察の網膜上に像が結ばれないとか、歪曲されるとか、その不穏な部分は削除されるといったことに表れます。そして、それは歪曲された象徴形成となって、経験の意味なるものを捕捉するどころか、それを敢えて歪んだものにしてしまうわけです。多分この歪曲の最も極めて巧妙な洗練されたかたちとは言語表現に、そして‘嘘 (lying)’ に表れるものといってよろしいでしょう。分析家そして患者それら双方にとって絶えず葛藤となることは、無意識を待つことです。キーツが語っているように、‘焦って事実やら理由づけを追い求めんとする’のではなく、そのプロセスを急がずに、直観 intuitions があなたにその経験の意味するところを語ってくれるのを待つということなのです。無意識が経験の意味なるものを、その真実のありようにおいてより綿密に語ってくれるのを待つとは、急いで‘出来合いの物語’にしてしまわないということ。つまり、そのように得てして、‘不確実性 uncertainty’と呼ぶところの内的な不穏な感情を極力排除することが目論まれるわけなのでして…。この‘物語をつくること story making’とは、夢の明示的な内容を形づくる上でフロイトが語った‘二次的な綿密な仕上げ (secondary elaboration)’ に一致するとも言えまじう。

■ J・アストール: しかしながら、もしも主として投影同一化の状態に生きていたら、‘真実性’ということを経験することなど可能ですかね？

メルツァー: 確かに、不可能でしょう。われわれが、投影同一化で生きているパーソナリティーの部分について語る時、真実性がどのような意味にしるカテゴリーとして存在し得ない世界に生きているパーソナリティーの部分について語ることになります。そこでは、ありとあらゆるものの意味が歪曲されてい

るわけです。それは、対象との、その欺瞞なるクオリティーとの自己愛的同一化のプロセスゆえにそうなりますし、さらには閉所恐怖症的不安のプロセスゆえにそうなるともいえましょう。つまりそこではすべての経験が、迫害感やら罣に嵌められた意識やら、‘異邦人’、‘見知らぬ人 stranger’ ‘異星人’といった感覚で彩られるのであります。思考の枠組み、そして時間やら地理上の枠組みすべてが投影同一化で甚だしく混乱を極めておりますから、そこでは時間そして地理上の基盤となる、あらゆる認知構造、それ自身が歪曲されてしまうわけです。もしも帰属しているわけではない対象の内側に身を置くとしたら、それは「基底想定グループ(the basic assumption group)」とも相容れないわけですから、それで対象を囲い込めんと遮二無二なるといったことがもたらされるでしょう。

■J・アストール:さて、ここであなたに、‘赤ちゃんらしさ babyishness のエッセンス’というものについて質問したい。あなたはご著書『The Apprehension of Beauty』の中で、それを乳児の中に存する潜在力として語っておられます。すなわち、この場合の乳児とは、親側の投影に対してのコンテイナーという意味合いであります(註;原書:P.57,邦訳書:P.74)。このモデルには青年期の発達に関連しての何か示唆がありますか。つまり、それらすべての投影は親たちに向かって投げ返されるといったふうな何か…?

メルツァー: 青年期の子どもを持つ親たちの抱える問題とは、第一に子どもとの‘接触の喪失’の問題であります。家族という組織体から、青年期のコミュニティーという、別の組織体へと子どもは連れ去られてしまうからです。これは親にしてみれば甚大な喪失です。子どもに期待していたこともこれ迄積み上げられてきた成果のすべてもが、さらにはしばしば密なる接触を失っただけではなく、思い遣りやら興味そして共感をも失うといった結果からして、そのように思わざるを得ないこととなります。子どもはギャング、もしくは「基底想定グループ」の連中とか、青年らのコミュニティーに於いて、その中のメンバーの一人になるでしょう。そうして、やがてその意味でも‘見知らぬ人 a stranger’になってゆくわけです。分析患者で、その子どもが青年期にあって、だからこうした接触の喪失、興味の喪失、共感の喪失といったことでひどく傷つき悩んでいる方々に、わたしが常日頃強調しますことは、いざというきのためにいつも待機していること、しっかりとその立場に踏ん張っていなさいといったことなのです。子どもがいつか家族のオリエンテーションに戻ってくるのを待ちながら、青年らのコミュニティーに参加することについて一切批判めいたことは言わないこと。いずれにしても、それがどんなものか、確実な情報はなかなか得られないわけですし…。わたしの見解としては、子どもの性愛的なことについてはあまり強調したくありません。青年期についての精神分析的著作には常にそうした点が得てして強調される嫌いがありますが…。青年期の子どもに浮上する性愛的目覚め、そこから発生するさまざまな問題に向けられる親の敵意なるものは、わたしに言わせれば、子どもとの接触を喪失したことから来る、派生的なものでしかありません。社会学的にみても、子どもは家族にとって‘見知らぬ人’になってしまっており、自宅を単に寝に帰ってくるだけの場所として使い始めるわけですから…。

■J・アストール:では、青年期にある子どもが耐えなくてはならない、ありとあらゆる親側の投影ということについてはどうお考えですか？

メルツァー:さて、この‘赤ちゃんらしさのエッセンス’に纏わる‘落とし穴’ともいえませんが、つまり親たちはその赤ちゃんらしさに誘発される格好で、子どもを見ながらも、赤ちゃんを‘潜在的なおとな’として見ることになりすわけで、さらには彼らの理想化された自己、彼らの悪なる自己すらも、もしくは彼らの達成できなかった野心とか期待感、そうしたありとあらゆるものを赤ちゃんに投影することになりがちです。それはかなり多くの投影を喚起させますから、当然ながら親たちと赤ちゃんの関係性には大いに困難が想定されます。それはたぶん最初の数ヶ月の間ではさほどでもないかもしれませんが、やがて子どもが母親の手の届かない或る社会的な行為を表わし始めるとき、それは顕^{あらわ}になってまいります。まだ母親と赤ちゃんだけの関係性である場合、こうした種類の投影はそれほど目立ったものではありませんし、どちらかといえばそれは‘ラブ・アフェア(恋愛じみた)’の関係になりがちです。しかし子どもが家族の他のメンバーにも接触できるようになったとき、そして家族の一員として統合されてきたとき、もはや‘母親の赤ちゃん’ではなくなってきたときには、こうしたありとあらゆる投影が誘発され顕著になるともいえそうです。しかし家族というものは極めて複雑で多岐に亘るものであり、極めて変動可能な組織体ともいえます。それについては、マティおよびわたしが、われわれの論文「Model of the Child in the Family in the Community」(『Studies in Extended Metapsychology』Chapter XIVに再録)でさまざまに論述を試みておりますけれども…。家族間での役割はシフトしますし、そこで表出され惹起されるクオリティーというのも或る状況から別のそれへとシフトいたします。家族を静的に捉えて描写するなぞ不可能極まりないといえましょう。

■J・アストール:ここであなたはMrs. マーサ・ハリス(マティ)に触れられました。そこであなたの臨床において、彼女と連携で取り組んできた結果として、どのような発展があったのかをお尋ねしたい。お互いにどんなふうに影響し合ったということになりますか？

メルツァー:そうですね。マティは明らかにわたしに甚大な影響をもたらしたと言えます。わたしがマティに影響したのはおそらくそれほどでもないかと思われ。というのは、マティのオリエンテーションというのは英文学でして、その研鑽が深く彼女に刻印されておりました。それに比べれば、心理学の学位などは彼女にほとんど何ら意味をもたらさなかったといえましょう。彼女の精神分析への興味は、治療的な手立てといった第二義的なものであり、リサーチ的手法としてのそれには何ら興味を向けておりません。彼女は発達に、そして子どもの発達に興味があったわけでした、またチャイルド・サイコセラピストという職種の発展に興味を抱いていたのです。彼女のわたしへの影響は実に深甚なるものと言えます。わたしは彼女及びその娘らを通して文学的教育を施されたのですし、また彼女の母子関係性についての見解、それはMrs. ビックとの共同作業および乳幼児観察の発展に由来するものではありますが、それがわたしに甚大なる影響を及ぼしました。おそらく当時わたしのクライニアン的トレーニングから、誕生後の最初の2、3ヶ月は、一般的な心理学的見地からみれば満足もしくは不満足と

いったことはありましようが、さほど強烈な情緒的体験のそれともいえないといった見解をわたしは抱いていたように思われます。それが明らかにマティをとおして、この乳児期が実に強烈な体験の時期であることへわたしの目を開かせてくれたということになります。それが実際のところわたしの分析治療をどのように変えたかについてはどうとも申し上げようがないのですが、ただ母親そして乳児とのごく親密で隔離された関係性、そして誕生という体験そのものがわたしにとってとてもリアルでヴィヴィッドに見えてきて、臨床素材の中にそれらが顕在化するさまに注視し始めたように思われます。それにまた彼女は、わたし自身の男性的な傾向、性急さとか、焦って手っ取り早く物事を片付けようとする傾向を或る意味宥めて、ひとまず落ち着かせ、時間を稼ぐことを教えてくれたようにも思われます。それらが彼女のわたしに対して影響を与えた最たるものであったといえます。

■ J・アストール: あなたが現在、文学と精神分析の関連性に関心がありなのは、マティが先鞭をつけてくれて、そうしたことの延長上にあるわけですね。

メルツァー: そうです。彼女の2人の娘が文学を専攻しておりまして、それでオックスフォードそしてケンブリッジから自分の書いた論文を送り届けてくれたのです。そして彼女らの読むものにわたしも合流して一緒に読むようになったというわけです。それがわたしにとっての文学教育になりまして、結果的に、わたしは精神分析文献への興味をまるで失うことになってしまったわけなのです。精神分析的文献に医学的な興味を抱いてから随分と経っております。そうした文献の一つとして貢献する意味での論文を著すことをわたしは止めてしまったわけですし、むしろわたしの経験を、そしてわたしのアイディアの発展を表現するような本を書き始めたということになります。執筆依頼があれば、何か論文を書くこともあります。もはや専門雑誌ジャーナルに寄稿することはありません。

■ J・アストール: さてここであなたの児童臨床について話を戻したいのですが、実際に児童のセラピイをしなくなったのはいつなんですか？そして、それはなぜかということですが・・・。

メルツァー: わたしの最後の子どものセラピイ・ケースというのはおそらく10年昔に遡るかと思われまう。自閉症の子どもでした。そして大してさほどいい結果をもたらすことなく終わったわけですが。スーパーヴァイザーとして、そしてコンサルタントとしても、わたしは児童臨床に携わってまいりました。何人かの子どもたちがいまして、それは同僚たちのケースでして、わたしは折々に治療的コンサルテーションで会ったりすることがあります。時として青年期になってから、わたしの元に分析を求めてやってくる子どももおりまして。それが今のところ、わたしの児童臨床との関わりといえ言えるでしょう。

■ J・アストール: でも、どうして児童のセラピイをお止めになったんですか？

メルツァー: そうですねえ。わたしの見解としては、こういうことだと思っんですよ。わたしがセラピイを必要とする或る一人の子どもをコンサルテーションしておりますと、その一方では患者を必要としている5人

のチャイルド・サイコセラピストがいるということ。わたしは子どもとのセラピーを退屈だと思ったことは決してありません。成人との分析治療が退屈だと思わないと同じように…。わたしはいつも子どもたちとはとても気楽にコミュニケーションすることが出来たんです。ですから、児童臨床から遠ざかったとしても、それは子どもたちへの興味が薄れたせいだとは思われません。多くの子ども相手のサイコセラピストは、中年になった頃、もしくは四十代の後半になると、どうもそれが退屈になるということはあるみたいなのですが、わたしの場合はそれが理由であったということは決してありません。

■J・アストール：そうしたあなたの見解とは別に、多分子どもの分析治療をしなくなったことには何かしら他のお考えがおりではなかったでしょうか？

メルツァー：いや、やはりわたしが先程述べました見解どおりでして、それ以外のことは毛頭考えられませんが。

■J・アストール：さて、ここでお尋ねしたい。あなたが著作のなかで、サイコセラピストとして実践する上で、グループの外に身を置くことを必要不可欠なこととして語っておいでです。それとの絡みで、そうした状況では孤独感、それに迫害的意識が勃発するといったことについて描写されておりますが。それというのはあなたご自身の経験なのですか？

メルツァー：さて、そこでわたしは語っておりましたのは、面接室の中にいるという経験でして、そしてこの状況の真正なる事実については外部の誰にも語りようがないといったことを理解するとき、それを言語にする場合、書体のかたちであれ言語的コミュニケーションにしてもですが、常に解釈のごく最初の段階に言及できる程度でしかなく、そうした試みもそこで何が起きているのかの事実を十分に把握し得るものとはならないということなのです。そうであればこそ、いくらか孤独に陥りがちともなりましょう。しかし、孤独というものはまた歓迎すべき何かでもあるわけです。なぜなら、どんな分析的グループも常に政治的なオリエンテーションがありますし、それぞれ群れが出来て、それで勢い批判したり、もしくは追従するといったことにもなりがちで、得てしてそんなふうに通じられることがら、そして理解されることがらが歪められることになるでしょうから…。こうしたことの結果の一つなのですが、わたしは講演することに全然意欲的ではありません。どうしてもやむを得ない場合を除いて…。わたしの場合、臨床素材を提示し、それについて論議を深めてゆくといった、すべてそうした臨床的教育 clinical teaching を専らとしてまいりました。それが、この分野で、何が語られ、そしてその語られたことの意味が何であるのか、聴衆の皆さん方にとって或る程度ご理解いただく上では唯一可能なやり方のようにわたしには思われます。また同様に、臨床素材から出発し、そこから進展することのない、つまり臨床素材について焦点づけられていない、どのようなことからもわたしは書く気にはなれません。

■ J・アストール:しかし、そうした孤独なるものは、以前‘情熱的なアタッチメント passionate attachments’に直面する勇気についてあなたがお書きになっておいでですが、その際に言及されたことにどのように関連してまいりますか？

メルツァー:そうですね。例えばですが、多くの分析における親密さ、お互い双方の興味、愛とか憎悪といったフィーリングの濃度は、その性質において極端にプライベートであります。勿論のことすべて分析がそうした情熱的な傾倒に至るともいえないわけですが・・・しかしわたしの見解としては、分析とはユニークな状況であり、それは母親と赤ん坊の親密さ、そして一組の恋人同士にも似て、そのプライバシーは言うなれば、いくらか‘監査役’による迫害を伴うといったことになりがちです。そこで何が起きているのか、その真実を語ることはそう簡単ではないということになりましょう。それは或る部分、その言語に絶したクオリティーゆえにということもありましょうし、でも或る部分ではそのプライバシーを決して侵おされたくないといった理由からでもあるのです。

■ J・アストール:しかし、あなたは出版物で臨床素材をかなり公開しておいでですよ。

メルツァー:分析患者が、そうした臨床経験を本というかたちで出版されることを歓迎しないだろうと思えば、そうした著作は困難でしょう。しかし、わたしの患者たちは大概、それを歓迎してくれております。(わたしは刊行するか否かは別として、すべての患者について記録することをポリシーにしていた時期がありましたわけで・・・)ただその例外として2人の患者がそれについて憤りを覚えたといったことがありました。ひどく腹を立てたわけなのです。或る一人などは、その憤りから回復して、それでわたしとの穏やかな関係性に立ち返るのに7年も掛かりました。でも全体にわたしの分析患者らは歓迎してくれましたし、そしてわたしがその分析について刊行した人々、スーパーヴィジョンもしくは海外でのセミナーで出会った人々もとても寛大でして、快くそれを了承してくださったのです。ここでも、ただ一人だけですが、わたしがその分析を援用したため友好的な関係に終止符が打たれたということがありまして、それも随分昔のことになります。

■ J・アストール:われわれがお話しを始めたとき、あなたはイギリスに来られたのは、その目的として、或る分析グループの人たちと一緒に学ぶこと、そしてMrs. クラインに分析を受けることであったわけですが・・・今この時点ではどうやらあなたはインスティテュートの外側に身を置かれ、ご自分の独自の道を歩まれておいでのように見受けられます。もしくは、それだからこそご自分の道を開拓されていったということかも知れませんが。それを振り返って、今ご自分ではどのように理解なされておいでなのですか？何ゆえにこのような仕儀になったのかということですが・・・

メルツァー:まあ、そうですね。それは純粋にわたしのパーソナリティーの為せる業ということになります。わたしは生来、どのようなグループであろうとも、喜んでご一緒するといったことができない人間なわけです。チーム競技などもそうですが、それは決してわたしの趣味ではないわけです。クライン・グループ

に参加していたのは、それを一つの‘家族’として見做していたからでして、何年も間かなり過剰にも熱心に入れ込んでいたと思います。Mrs. クラインが生存していた時代にはこの幻想もまだ維持されることは容易であったわけですが、しかしその死後にもはやそれは不可能でした。そして、それがもはや家族ではなく、単なるグループでしかないことがわたしの眼に明らかになった時点で、それから距離を取ることが始まったといえましょう。わたしはごく何人かの僅かな人々との親しい関係を結んでゆくようになりまして、Mrs. ビックとかロジャー・マネ-カイル(Roger Money-Kyrle)とか、そしてそれから徐々に他の人たちとの間は疎遠になる一方だったわけです。そして、わたしは「ソサエティー」では言えなれば‘ウシアブ(小うるさい人)’になっていったのだらうと思われます。マティとわたし自身、そこでのトレーニングは誤^{あや}まった方向へと舵取りされていると感じておりましたし、特に児童分析はそこでは正当な位置づけが与えられていませんでした。わたしのオックスフォードへの移転への決意は、マティと一緒に移転してくるはずと以前にそのように決めていたわけですが、実際の「ソサエティー」における運営といった関わり合いからわたし自身を切り離す動きの一環でもあったわけですが、事実そこにわたしは何年ほどか委員会(committees)に籍を置いていたわけですが、ついにそうしたことは自分の得手とすることでもないし、ここでは何ら有益な影響力をついぞ持ち得ないといったことを悟ったわけなのです。

■ J・アストール: そもそもあなたのパーソナリティー自体に、より大きな精神分析的グループの中で影響力を発揮するような才覚が備わっていなかったという点では、何かしら後悔をお感じですか？

メルツァー: いいえ、政治的に積極的な役割を担えると信じるのを断念したことについては、わたしはむしろ安堵を覚えております。今にして思えば、あれは多かれ少なかれ‘興行 the entertainment industry’のようなものではなかったかと思われますし、それに実際にこの世で何かしら建設的な業績を残せるとしたら、「作業集団(ワーク・グループ)」でなくてはならないとも考えておりますから…。そこで、実際のところわたしはありとあらゆる政治的なものに興味を失ってしまったということになります。正直言って、わたし自身をもはやソーシャリスト(社会主義者)と呼ぶわけにはゆかないでしょう。わたしはただの‘元ソーシャリスト an ex-socialist’であります。わたしは非社交的な人間なわけです。

■ J・アストール: どうやらご自分でもうまく折り合いが付いたようにはお感じではないようですね。でも、あなたは‘情熱的なアタッチメント’に直面するのに必要な勇気と、家族生活の基盤としての‘親切心(kindness)’というものを比較対照づけなされておいでです。ここには明らかに妥協点が見出せそうじゃありませんか。真実であることは必ずしも常に‘親切’にはなれないというわけですから…。

メルツァー: 確かに…。わたしが申しておりました‘親切心’というのは‘赦し forgiveness’を基盤としております。人は常に人の願望を充たしてくれないことで人々を赦さねばなりません。そしてその逆に赦されることの願望もまた抱くわけですが。‘赦し’の眼目(エッセンス)とは、懲罰的であることや報復へのすべての願望を断念するということでもあります。これは、わたしがマネ-カイルから学んだことでもあります。

彼は、わたしの父親と並んで、わたしにとっては実に掛け替えの無い、'親切なる人'と呼んでいい2人のうちの一人なのです。その親切心というのは実に欠点といえなくもないほどでした。或る意味、親切心というのは傍からみて気弱さと見分けの付かないもののように見えることもありますわけで。彼らのどちらにも決して気弱な男性ということでは毛頭ないわけですから。。。

■J・アストール:あなたのお母上は親切心のおありの方でしたか？

メルツァー:ええ、そうです。でも母親について言えば、その性格上、おそらく父親に比して感傷的(sentimental)である傾向は幾分少なかったかと思われます。

■J・アストール:あなたは、ご家族の中では何番目のお子さんでしたか？

メルツァー:末っ子で唯一の男の子、勿論そういうわけです！

[山上 千鶴子訳;2019/02/20]

6 Ladbroke Square
London W 11 3LX

[※原註;対談の実施された日付;1988年12月29日]

※参考文献;

- Klein, M. (1932)The Psychoanalysis of Children, London:Hogarth.
Klein, M. (1975) Narrative of a Child Analysis. London:Hogarth.
Meltzer, D. M. (1967) The Psycho-analytical Process. Strath Tay:
Clunie Press. (邦訳;『精神分析過程』松木邦裕監訳・飛谷渉訳. 金剛出版 2010)
Meltzer, D. M. (1986) Studies in Extended Metapsychology. Strath Tay:
Clunie Press.
Meltzer, D. M. (1988)The Apprehension of Beauty. Strath Tay:Clunie Press.
(邦訳;『精神分析と美』細澤仁監訳 上田勝久・西坂恵美子・関真粧美訳 みすず書房2010)

※原典;A Conversation with Dr. Donald Meltzer

Journal of Child Psychotherapy. 1989. Vol. 15. No. 1. P.1-13]

By James Astor, London

※訳註;ジェームズ・アストール(James Astor)は、Journal of Child Psychotherapy
の Advisory Board(顧問)の一人。ユング派アナリスト。
